

昭和50年代の趣味週間切手

永吉 秀夫

趣味週間切手は昭和30年の「ビードロを吹く娘」以降、輪転グラビア機による多色刷り大型切手(目打穴中心36ミリ×51ミリ)という大型サイズが定着していました。しかし昭和50年からはサイズを一回り小さい33ミリ×45ミリに改めた上で、2種連刷の形態となりました。

切手趣味週間

第4期

第4期(1975-84) 古美術から取材した連刷切手の時代

昭和50年(1975年)からは連刷形式となり、再び古美術からの取材が続いた。

1975年

1975. 4. 21



松浦屏風

1976年

1976. 4. 20



彦根屏風

1977年

1977. 4. 20



機織図

1978年

1978. 4. 20



寛文美人図

1979年

1979. 4. 20



立美人図

この時期の趣味週間切手の収集でポイントとなるのは、連刷のままの使用済(オンカバー含む)でしょう。この時期は第1種定形便料金の2倍と一致する料金がいくつかあって、連刷の形で使用されたものがある程度残されていることが期待されます。

とは言っても、成り行きにまかせては揃うものではありません。実はここに示した10点のうち7点は、筆者が自分で「作った」ものなのです。全体として消印は良好ですが、「局」が全くわからないもの、「年」が全くわからないものが、1点ずつ含まれています。

切手趣味週間

第4期

古美術から取材した連刷切手の時代(続き)

1980年
1980. 4. 21



西川祐信《春の野遊図》

1981年
1981. 4. 20



鈴木春信《見立夕顔》

1982年
1982. 4. 20



鳥居清長《待乳山の雪見》

1983年
1983. 4. 20



喜多川歌麿《台所美人》

1984年
1984. 4. 20



東州齋写楽《大谷鬼次・岩田半四郎》